

麻生路郎☆主筆

Pensoj flugas trans la land - limon
 The Senryu Zasshi
 No. 283



十二月號

昭和廿二年七月一日第三號創刊
 昭和廿五年十二月一日發行第五號
 (每月一回一日發行)
 創刊大正十三年・通卷二百八十三號

川柳雑詠



川柳航路

座談

出席者

麻生路郎

麻生葭乃

奥村丹路

大西野介

司會
須崎豆秋

分だけに判る句が生れる筈であると思ひます。所がこう言う風な冷静な観方をされるのは作家としての修練が積んでゐるとも言えますが――。

丹路「不思議なもので、如何に悲惨な場面にも自ら直面している時であつてもヒョイとさうした客観的に自分を見ると言ふことがまゝあることを自分も経験している。尤も奥さんのおつしやる様に幽王君の場合は時間の経過があつて、此の句が生れたのであるが、おそらくその両面から此の句が生れたのではないかと思はれます。」

葭乃「両面とはどう言う意味ですか。」

丹路「それは、その悲惨な場合にチラとそう言う事が浮かんだが、その時に句にまとめたわけではなく、時間が経過した後に於て、再びそう言つた悲惨な出来事を頭の中に再現して、自らをその場に直面さしてゐるケースではないでせうか。」

葭乃「その悲惨な状態の時にチラツとさへもさう言う事は思ひつかぬと言う処が、父性愛と母性愛の違ふ処です。一同「同感、それは確かにさうですね。」

葭乃「私などはロンドンを失つた時は一週間位御飯も喰

べなかつた。それで私の父からこの頃は、お前の性格が一変したとまで言はれた位です。一周忌のお茶の子を買いに行つた市電の中でも、人にはみつともない位涙を流してました。」

路郎「父性愛と母性愛の問題が出たが、成程さうした瞬間に客観的な、或映画の伴奏と言つた様なことがフツと頭に浮ぶと言ふことは、男性と女性との相違であることは是認し得られないことはないが、母性愛よりも父性愛の方が弱いとか暢氣などか言う事にはならない。恐らく同じ愛情のデグリーを持つてゐると思うが、これは箇々の問題で同一に断ずるわけにはいかない。私も長男のロンドンを失つて神経衰弱に陥り、約半年出勤せず、遂に辞表を提出した。そして大きな衝激による一句すら句に纏らず、約一年後に於て始めて迷るやうに愛兒を思ふ句を詠んだことを思うと、決して父性愛が母性愛に劣つてゐるものではないと思ふ。幽王君のこの句は確に或時間の経過によつて客観的に句は詠まれてゐるが、而も其の底に流れてゐる父性愛に就ては涙なくしては詠めない句である。」

野介「それで問題の焦点は

豆秋「十一月号からの句を対照として句評をして頂きませう。一寸月評の形式を変えて、先づ皆さんの御提出になつた句を並べてみますから、句の順序に拘らず御自由に批評して下さい。」

映畫なら伴奏がある兒の危篤

ガラス製品のやうな一人つ子を抱き

そんな子はうちに要らない怒りやう

メニユーの安い方へ方へ妻の指

では、野介さんからどうぞ、野介「先づ幽王さんの「映畫なら」の句ですが、この句の内容は相当に複雑なものが

有る様に感ぜられます。恐らくこゝにある子と言ふ文字の意味するものは自分の子供であり、その子供の危篤の状態を、作者としての別個の人格が一定の距離を持つて、それを批判してゐるのではないでせうか。そこで「映畫なら伴奏がある」とありますが、この伴奏の意味は、恐らくどのやうな悲痛な音楽であるにしても、この人間としての子の危篤の立場にある処の親自身に對しては所詮感情を刺戟させる夾雜物に過ぎない。そこを作者が映畫なら伴奏なる文字を持つて來て自分の苦痛な状態を客観してゐる自虐的な心理の複雑さは、やはり幽王

氏の現代川柳人である処の位置を支えるものでないかと思ふのです。この單なる現実がその位置に於て其儘に表現されず、或る一つのレホルムすることによつて現実の核心を掴んだ句として成功してゐるのではないかと思ひます。

葭乃「幽王さんは最近愛兒を亡くされたのでこの句を詠まれたのだと致しますと、此の句をお作りになつたのは、可成ひにちが經つてからの事であろうと思ひます。危篤状態にある場合ですと、「映畫なら伴奏がある」と云う様な冷静な見方は出來ないと思ひます。事件があまり大きすぎるためにもつと感傷的な、自

「映画なら伴奏がある」と言う一句に對する不逞なる上の句にあるわけですが、これが果して子の危篤に對する父としての感情の表現を成功せしめてゐるか、或はその反對であるかと言ふことであります。恐らくこの伴奏なる文字は先程私が指摘致しました通りどんなに悲痛なる音楽であろうとも子を失いつゝある父の感情にとつては、夾雑物に過ぎない、而もこの一つの毒的要素を以つて、自分の悲痛を表現してゐる所に作家の悲痛が倍加されて表現されてゐる。單なる子を失いつゝある處の悲しみ、それだけが素直に表現されればこれ程までの人間実存の奥にある或一つのシリヤースのものにふれ得ないのでないかと思ひます。

野 介 問題は藝術と現実の相違なのでこの句はこれ位で打ち切らしてもらひます。

丹 路 此の句は因らざる父性愛と母性愛との問題にまで發展して参りましたが、この辺で止めて頂いて次の句にうつて頂きたいと思ひます。

野 介 此の句の良さにガラス製品と言ふ血のかよわな無機物的なものと、一人つ子と言ふ目の中に入れてもいたくないと言ふ、さうした人間的な、あまりに人間的なものと結び合して一つの句としての成功を得てゐると言ふ点ではないかと私は思ひます。一人つ子に對するこれほどの、ように子供をだいてゐる姿を客觀し、それに同感した作者の主観がこゝう言ふふうな表現をこらした處はやはり作者の年齢を考えさせられます。つまり一人子をガラスと言ふふうな感受の仕方、これはやはり戦後の若い女性の感覚の尖鋭な表現でないかしらと思ひます。これは恐らく明治生れの女性にとつて同意し難いものがあるかも知れませんが、現在の川柳の新しい分野を切開こうとする人々には同意されるであらうと思ひます。

野 介 此の句の良さにガラス製品と言ふ血のかよわな無機物的なものと、一人つ子と言ふ目の中に入れてもいたくないと言ふ、さうした人間的な、あまりに人間的なものと結び合して一つの句としての成功を得てゐると言ふ点ではないかと私は思ひます。一人つ子に對するこれほどの、ように子供をだいてゐる姿を客觀し、それに同感した作者の主観がこゝう言ふふうな表現をこらした處はやはり作者の年齢を考えさせられます。つまり一人子をガラスと言ふふうな感受の仕方、これはやはり戦後の若い女性の感覚の尖鋭な表現でないかしらと思ひます。これは恐らく明治生れの女性にとつて同意し難いものがあるかも知れませんが、現在の川柳の新しい分野を切開こうとする人々には同意されるであらうと思ひます。

野 介 此の句の良さにガラス製品と言ふ血のかよわな無機物的なものと、一人つ子と言ふ目の中に入れてもいたくないと言ふ、さうした人間的な、あまりに人間的なものと結び合して一つの句としての成功を得てゐると言ふ点ではないかと私は思ひます。一人つ子に對するこれほどの、ように子供をだいてゐる姿を客觀し、それに同感した作者の主観がこゝう言ふふうな表現をこらした處はやはり作者の年齢を考えさせられます。つまり一人子をガラスと言ふふうな感受の仕方、これはやはり戦後の若い女性の感覚の尖鋭な表現でないかしらと思ひます。これは恐らく明治生れの女性にとつて同意し難いものがあるかも知れませんが、現在の川柳の新しい分野を切開こうとする人々には同意されるであらうと思ひます。

野 介 此の句の良さにガラス製品と言ふ血のかよわな無機物的なものと、一人つ子と言ふ目の中に入れてもいたくないと言ふ、さうした人間的な、あまりに人間的なものと結び合して一つの句としての成功を得てゐると言ふ点ではないかと私は思ひます。一人つ子に對するこれほどの、ように子供をだいてゐる姿を客觀し、それに同感した作者の主観がこゝう言ふふうな表現をこらした處はやはり作者の年齢を考えさせられます。つまり一人子をガラスと言ふふうな感受の仕方、これはやはり戦後の若い女性の感覚の尖鋭な表現でないかしらと思ひます。これは恐らく明治生れの女性にとつて同意し難いものがあるかも知れませんが、現在の川柳の新しい分野を切開こうとする人々には同意されるであらうと思ひます。

十二月號・目次

座談「川柳航路」……………由比種三郎

文藝たけき祭勸進帳……………前田 伍健(一五)

徒然草と古川柳、追補……………富士野鞍馬(一五)

アロハシヤツ……………前田 北海(一五)

詠史川柳、につぼん(4)……………戸田 古方(一四)

川柳あるのみ……………家沢 齊花(一三)

窓 口……………藤生 路郎(一九)

古川柳と歌舞伎を彩る女……………水谷竹莊(一〇)

都 信(二)……………福田山雨樓(一九)

川 柳……………藤生路郎選(一六)

近 作……………藤生路郎選(一〇)

各地 柳壇……………浪玲之介選(一五)

課題吟「カメラ」……………(一〇)

動 靜……………(九)

不朽洞会から……………(一〇)

編輯室にて……………(一〇)

路 郎 反駁精神だけではい
かん。自然に生きろ。

梨 里 〓このガラス製品は單
に一人つ子をこわれ物のよう
に大事にする云う丈でな
く、そう云う風に大事に育て
られた一人子の弱々しさが何
か透徹な様に感じた—
それを云いたかつたので
す。

豆 秋 〓それでは梨里ちやん
筆記代つて下さい。

丹 路 〓梨里ちやんの狙いは
結局僕の狙いの的に違いなかつた。問題はその表現法にあ
るのだ。がボクにしても「や
うな」に代える他の言葉、或
は他の表現法が見付からな
い。

野 介 〓私の求めてゐるもの
は私の前に投げ出された一つ
の句であり、どう言う動機に
よつてそれが作られたと言
問題はまた別のことです。批
評家としては、現実に自分の
前にある句を感受すること、
それに対する受け入れ方だけ
が問題になるのでありまし
て、今の句の場合、この表現
された形としてのこの句は立
派であり、川柳塔十一月号に
於ける一つの主張を持ち得る
資格のある句であると思いま
す。

豆 秋 〓それでは次へ移つて
頂きます。
路 郎 〓「そんな子は」の句

は極平易に詠まれてあるが、
明治時代の親爺の態度が非常
に適切にキヤツチされている
のを面白く思う。

丹 路 〓私が面白く思つたの
は「おこりやう」と言ひなが
らおこつていない親が判る処
です。

路 郎 〓それは勿論だよ。

野 介 〓それが父性愛ですよ。

同じ父性愛なら「そんな子は
うちに要らない怒りやう」と
言わずに雅幽さんの作の「コ
マ廻すやうに倅をよく使ひ」
の方が利巧ではありませんか

野 介 〓功利的な意味に於て
は確にさうでありませんが、今
提出された句の焦点にあるも
のは「うち」にあるのではな
いかと思います、これが日本
の傳統の一つの封建的な觀念
に代位されているわけなんです
が、恐らく怒つてゐる父の
觀念のうちにさうした子に
對する思うやうにならない、
やはり奥さんから提出された
と同様の功利的な念がないで
もない。然しこの句に於ける
「怒りやう」と言う端な表
現に於て子に對する恐らくは
父であらう処の親の純粹な怒
りが汲みとれるのではないで
せうか。こゝにこの句が單
なるさうした封建的なものから
人間的なものに食ひ入る処の
アドヴァースされた父の子に
對する愛情を汲みとれるんじ

やないでせうか。その意味に
置きましてこの句はやはり私
達の注目に値する句である
と思います。

野 介 〓明治時代或は大正の
初年時代の人にはこの句の父
性愛と言ふものは充分にうけ
とれますが、現在廿五才以下
の婦人にはこの句を通して父
性愛は認められませぬね。

豆 秋 〓廿五才以下とせうらい
限定しましたなあ(笑聲)

野 介 〓梨里ちやん、若い人
どうです。

梨 里 〓私は戦前派ですよ。
確にだいたい廿五才を境にし
て非常に考へが違ふと思いま
す。けれども廿五才以下の人
でも子供の時代に親に叱られ
た経験がある以上、この句は
どちらかと云えば、十人が十
人とも有勝ちな事で何処に
も見られる風景であるから、
そこから父性愛が判らないこ
とはないと思います。

野 介 〓それが判らないこと
がないと言ふのは私の家に生
活してゐるからです(笑聲)

路 郎 〓もうこの位にして置
こう、この句は柳多留と一脈
通するものがある。
豆 秋 〓それでは又父性愛・母
性愛で尾を引きましたが、次
の句に移りませう。
メニユーの安い方へ方へ妻
の指
司会者もつい、しやべりたく
なつたので、一句出させて貰
います。日常お台所の經濟面

耳鼻咽喉科 羊田病院

院長 羊田哲三郎
大阪市南区長堀橋交点西・電話船場五〇〇〇番

を預つてゐる妻として、メニ
ユーを見ながら子も交えて何
人分かのトータル等も浮べな
がらの胸算用に、つい安い方
へ方へと自然に指が動いて行
く心理の姿など状態がよく出
ています。句の構成は五・九・
五と云ふ破調になつてゐるが
「方へ方へ」がよく利いて居
り五・七・五にでも結構纏る句
ですが、作者は破調を少しも
意識することなく、自から出
來上つた破調であるがために
成功してゐる句と思ひます。

野 介 〓「さう云う句をどう感
じられますか。」

豆 秋 〓破調で成功してゐる。
野 介 〓日常生活に於ける一
つの機微を捕えたものとして
成功してゐると思う。妻の指
の動きが生々しくメニユーの
上を走る姿をグイグイツドに
描き出して、而も追詰められ
た生活を強いられた現代の勤
勞階級の妻君が求め得た、一
つの幸福としてのレストラン
に於ける家族一同の会食、而
もその楽しい円居に於てさえ
も知らず知らずにさえもメニ
ユーの安い方へ走つて行く—

—この意識しない女性の意識
の走り方、これを鋭く捕えて
いる処にこの作者の凡庸なら
ざる慧眼があるのではないか
と思ひます。恐らくこの作者
の日常生活に於ける主婦の生
活に對する、一つの慣性がこ
うした場面にまで露わな形を
とつて出たと云うことは、或
は日本人の宿命的なものかも
知れませぬ。アメリカでは一
年間の給料を得た女事務員が
或る避暑地で三日にして一文
無しになれば、又元の職場に
返つて元の地位で嬉々とし
て働く云うことを何かの雜
誌で読んだ事がある。然しこ
の句の捕えてゐる処は、日本
の主婦として日常的な慎ま
しさ、或は突詰めて云えば日
本の主婦の持つ一つの暗さと
云う風なものを指の動きと云
う事で捕えて居る。この把握
の確かさ、これは一應買わな
ければならぬと思ひます。

野 介 〓野介さんの評でこの
句は盡きてゐると思ひます。
豆 秋 〓それでは此の辺で打
切らせて頂きます。御苦労さ
んでした。(梨里筆記)



文藝たぬき祭勸進帳

前田 伍 健

第七回たぬき祭を十月二十八日
子規堂があり、松山八百八狸お家
騒動の根本奥平久兵衛の墓のある
松山市末廣町正宗寺で催しまし
た。十八時開会散会はいずれも自由
消失、会費は二八円で芝の葉え園
子と狸の何やらの様な菓子共に栗
を刺したものが配られ、市長
代理やら縣民生部長、親光協会
長やらの鹿爪らしい狸礼賛の挨拶
勿論住職の読経、偈、一同配られ
た膳写すりの大盤若心組合唱など
あり、会員若心の、まんまる月夜
のたぬきさん云々紙芝居に、餉
を一本づつ持たされて見物、短歌
川柳、俳句の献詠あつて、盛会だ
つたまつたお祭の一夜でした。そ
の席で、富樫対べんけいの勧進帳
が別紙の通であります。べんけい
は私でました。狸像を引きつれて大
笑いで通ると云う訳です。

たぬき勧進帳

×「近頃世間の風潮に乗じ、怪し
く合点のゆかぬ事ども多し、こ
の度び愛申明王の命に因り、こ
の関を通るもの、一々詮議致す
るものなり、誠に愛申修験者な
らば勧進帳を読み候へ」
○「さらば勧進帳いざ読み奉らん
……そも、歴史は正しき臆測
の學問であり傳説は善惡、戒
り慎、道徳の小説である。小説に
は虚実あり、狸にも又た嘘実あ

り文藝的創作あれば宗教的色彩
も又た同じ、狸念狸想、大人の國
の忘我の夢、秋の夜長の、まつ
りごと、心の木魚打ちたいとき
露けき風も何んのその、時しも
頃は十月の、たぬきに縁の二十
八日、こゝ各刹の正宗寺、集ひ
し人ぞ床しける。
苦樂の坂も哀愁の、その山河も
修業ぞと、山轉、滑脱、七変八
化、裏から登るも文化の道、感
謝に鳴らす腹つみ。
×「然らば問はん、頭にいたゝく
竹皮笠は」
○「これぞ上見ぬ脚下一照願の、
いましめなり」
×「掲げし徳利は、○八は」
○「福德、利徳、延命長壽は百藥の
長、まつた○に八の字、これこ
そは、天地圓滿、無礙大觀、文
化、交明、発達、希望

アロハシヤツ

太平洋上の樂園、當夏のハワイ
で愛用されてゐるアロハシヤツ
は、和服の浴衣といつた夏向きの
ハワイ式な着心地のよい寛いだ、
スポーツシヤツの一種である。終

×「通帳は如何に」
○「交際自在、総てに通ずる本能
念願」
×「尻尾は、金玉はッ」
○「過つて憚らぬ、正直証固の反
省願大尻尾、又た金玉こそ、
これ経済の伸縮自在のシンボル
なり」
×「それほご備はる狸にして、な
ぜカチ／＼山で失敗せしぞ」
○「さればあの時、ねはんの月ば
雲に隠れ、ぼんのうの風起り、
ついに本能の、いたづらから、が
んじがらみの荒縄攻め、正当防
衛逃げるに如かず、と逃げたれ
ど、罪は罪、罰は罰、春中の薪
に火をつけられ、不動明王、火
炎の誓め、又た竜王の泥舟水攻
め、元より承知で甘受せり」
×「天晴れ、明答、御通りあれ
り」
○「添けなしと立つ折に、うつか
り出した大尻尾、すわや大變、
一期の浮沈と、力をこめて打ち
まくる、ボンボンボンの腹つみ
み、世は太平の有難さ、ついに
は泣かぬ狸奴も、ほろ／＼提灯、
村時雨、一期の涙ぞ殊勝なる」
×「屋島、喜の宮、喜左衛門、お抽、
金平、淨願寺、土佐の狸に阿波
狸、淡路の芝に佐渡狸、分福
茂林寺、そのほか派山、八百八
狸、喜び男み、お祭の本座にこ
そは直りけり、本堂にこそ直り
けり」

前山 北海

戦後日本に傳來したのはよいが、
その愛用者は、殆んど所謂アプレ
ゲル型であり、それを特權階級
の象徴のように着出し、アロハ種
族なごと呼称されて、嫌惡的

さえなっている。更にアロハシヤ
ツは、斯うした一部不心得者の代
名詞にさえ使用されている。
これは、ハワイでは、親しみ深い
送迎の意に使用されている「アロ
ハ」の言葉からしても、日本に於
ける斯うしたアロハシヤツに關す
る現象は、ハワイ人士にとつては
全く苦しい次第である。
最近の川維に掲載された左の三
句は、日本の柳人のアロハシヤツ
愛用者に対する心算を詠じたもの
として、私の注目を惹いた。
海山の恩を忘れたアロハシヤツ
故郷をすてて若氣のアロハシヤ
ツ 遊星
アロハシヤツ知性とほしき人に
する 斗志
何れの句もアロハシヤツによつ
て着ている本人を彷彿とさせてい
るが、それだけにハワイ人として
の私には全く悲しいことである。
アロハシヤツが本場のハワイで
始めてデビューしたときは、今から
十二三年前のことであつた。ホノ
ルルの一支那人系服裝店で在來の
開襟半袖のスポーツシヤツに
工夫を加えて、ボタンを、明るい
実の殻で作つたものにし、明るい
色や派手な色彩のハワイデザイン
の捺染模様の生地で作立てて、ア
ロハシヤツの商標で發賣したと
ころが着流しのゆるやかな寛いだ
感じが忽ち一般の嗜好に投じて、
日ならずして各島に普及した。
やがて米大陸の避暑地に紹介さ
れ、夏向きのシヤツとして人氣を
博し、忽ち夏期服裝界の寵兒とな
り、全米に廣く流行するようにな
つた。アロハシヤツは、数年間ハ
ワイから米大陸へ百數十万ドル輪
出される盛況を続けた。
スポーツシヤツ界に革命を齎し
たアロハシヤツは、その後ハワイ
や米大陸でデザインに色々と工夫
が加えられた。生地も木綿、人

絹、交織、本絹と範圍が廣くな
り、各メーカーは競うて斬新な柄
を捺染したものを賣出し、廣く老
若男女間に愛用されるようにな
り、ハワイ式の派手なデザイン
のスポーツシヤツは、一般にアロハ
シヤツと呼ばれ、夏シヤツの王座
を占めるようになった。
ハワイでは、最初銀行、大会社
や官廳などでは不文律で、その着
用を禁じていたが、流行の波には
抗せず、官廳でも卒を利かして、
六月から八月迄の三ヶ月の夏期中
はその着用を公認したので、汗だ
くで窮乏なグレスシヤツで執務の
要はなくなる大助りとなつた。
日本で夏祭へ浴衣がけで氣輕に
出掛けようには、ハワイでは、ハ
ワイを統一して太平洋のカホレオ
ンと呼ばれてゐる、カメハメハ大
王を記念するカメハメハ祭の六月
十一日には、各國人種がアロハシ
ヤツに寛いで和やかに各種の行事
を樂しむが、ハワイらしい微笑し
風景である。
アロハシヤツも着る人と所によ
つて格段の相違が見られる。
日曜の市長寛ぐアロハシヤツ
六月の官廳となるアロハシヤツ
大王祭老若男女アロハシヤツ

ハワイの俳人は、種々なハワイ
特有の季節で作句しているが、ア
ロハシヤツや大王祭は夏の季節と
なつており、これによつてハワイ
の夏の感じを詠んでゐる。
日本に於て、アロハシヤツが好
ましくならぬ一部戦後派の代名詞と
なつてゐるのに対して、ハワイの
ウイロー社の同人達が、アロハシ
ヤツをローカル的な兼題として、
あらゆる角度からこれを詠んで、
本格的にアロハシヤツを日本の柳
人達に示してくれたら、嘗て「二
等後家」を川柳で紹介したよう
に、參考になるであらう。

アロハシヤツは、種々なハワイ
特有の季節で作句しているが、ア
ロハシヤツや大王祭は夏の季節と
なつており、これによつてハワイ
の夏の感じを詠んでゐる。
日本に於て、アロハシヤツが好
ましくならぬ一部戦後派の代名詞と
なつてゐるのに対して、ハワイの
ウイロー社の同人達が、アロハシ
ヤツをローカル的な兼題として、
あらゆる角度からこれを詠んで、
本格的にアロハシヤツを日本の柳
人達に示してくれたら、嘗て「二
等後家」を川柳で紹介したよう
に、參考になるであらう。



大阪市 武部 香林

擢り減つたタワシの如き人生か
世智たけて黙つて帰るこつを知り
商魂の無い駄引が鼻につき

兵庫縣 戸倉 普天

持駒が出来てぼつ／＼王手なり
もう酒も落ちたと古い馴染なり
それ／＼の悩みを持つて天理教

大阪市 浪 玲之介

水 害

倒れてる家にチンチロリンが鳴き
ある時の女は金に見積られ
桶の輪が外れたような病づかれ

鳥取市 大西 八歩

儲け話しへ人間よく笑ひ
不拂ひの誠意を買つて呉れと云ふ
着て食べて寝る幸福は忘れられ

横浜市 福田 山雨楼

上高地金を掏られた夏の夢
病院の先生ワンマン振りを見せ

池田市 戸田 古方

ちやつかりとした癖だけは抜けていず
借金をすることにきめ風呂に行く
P.T.A.にも氣兼ねしながらするプラン

東京都 前山 北海

中共中央委の追放

当選の喜び僅か小半日

血を賣りに素足の主婦は子を連れて
親米か親ソにレッテルきめたがり
走馬燈の興亡続く銀座街

氣がつけば「被來しやいまし」の顔姿り
左前けちな性分にじみ出る
眼差して女の連れを会得させ

布哇 内藤 草一郎

嫉くよりも寝化粧なりとして御覽
承知では來たが避けたい借浴衣
ウンと言へ親に日本を見せてやる
病院に居るに後添もうきまり

生活の手段にしてもストリップ
うもの人顔や姿ぢやないらしい
皆月賦自働車慰謝料洗濯器
嫁がせて置いて借金無期延期

大阪市 福田 安夢

ピストルが嬉しい巡查の歩きやう
日向にて見れば生ブ毛の多い娘よ
チエーン颱風

大小屋を直す大工が二・三人
夕焼けに詩もなし高く鉄をふり
裸ショウ都合の悪い人に逢ひ

東京都 川村 好郎

考へておこうと履歴書見向きせず
運命にさからはず東京にまだ暮し

岡山縣 浜田 久米雄

湯どうふへ冬が來ている箸をとり
信心をする氣の腰がまがりすぎ
亡母七年忌

好きだった菊の蕾も七年目

大阪府 西尾 栞

迎え傘の妻に教へる水溜り
変る世相へ夫の腕は案じられ

又しても女房四人の子四人の子
一二駅過ぎて落ちつく旅心

大牟田市 高田 抱逸

銀婚を焼酎で祝ふ生活向き
就職の浅く月賦を断わられ

栗拾ひ

栗々と呼べば見張ニユット立ち

布哇 市岡 曉舟

看護婦が來ればオシ、が仕度くなり
借る筈へ只銀行を見て歸り

米子市 三鴨 美笑

金融にうれしい金どいやな金
目の先の慾から妻は抜け切らず

とやかくを云はすいつしよにしてやりな
通俗に妻は育てゝゆきたがり
稻株の上にくるんだホームラン

大阪市 市場 没食子

AもBも浮名だつたかひと添ひ
ベニシリン時代に君の旧弊な

あんまり泣くので看護婦さんに嫌がられ
保証人そも／＼それがすかんびん
ジエーン颱風

浮いた疊の上でどうなとなりやがれ

大阪市 須崎 豆秋

猫抱いて窓から月を見せてやる
秋らしくなつたと坂の道下りる

大阪はよろしまむしを焼く匂ひ
恐わい風だつたと雀しやべり合ひ

兵庫縣 北川 春巢

黒潮列車幸福そうな顔並ぶ
俗つばくてなど一人前に云い

絶景へ一人で來たが淋しくて
飲む程に理性が芽えて旅の宿



岡山縣 大森 風來子
妻いとし懸貨物を出し続け
先生は生理作用に氣がつかず

母逝きぬ

母病みて町の美展も覗かざる
不歸の旅一重の帯も重からん
母の座に母はおわさす二七日

大阪府 新川 博也
初恋の頃の日記も水づかり
墓参りだけはくど母老ひぬ

佛前に読経の母まゐるし

出雲市 尼 緑之助

官僚をのゝしる人も小役人
何事も臍は申さずうつむけど

大阪府 水谷 竹莊

ストリップどこがいたいえゝのんや
意地つ張り同志好きとはよう云わす

下関市 國弘 半休門

良く似てる似てるで安産祝はれる
凡人の旅へプランが多すぎる

兵庫縣 小西 無鬼

教育上うちでは禁酒してゐます
信仰は信仰として腹もたて

大阪府 土井 文蝶

借金取りが来るので野球観てゐます
一線を画すとは友の水くさし

布施市 糸本 醉月

曇つても月見は月見の酒の味
ジェーン台風勝氣な妻も少し折れ

警察より恐い税務署の向いです

岡山縣 山分 淑郎

ラヂオ消す役が主任に一つ増え

我が家は夜寝るだけの明りなり
振られても恋しい人の肩をもち
妥協点見付けそれから世話になり
もう此処で母が折れるを待つばかり

大阪府 富岡 淡舟

ぜい肉をもてあましてる女なり
夏の夜や市会議員の酔虎傳

奈良縣 飯降 白香

夜星朝星わが生活は樂にならざり
榮轉へおもひもせぬよな世辞をいひ

奈良縣 西辻 竹青

巡視して寝相電話で注意する
自然には勝てず破壊の後始末

山口縣 長野 井蛙

出せば出る力を知つた風の後
アリバイをはつきりさせる傘を借り

大阪府 竹田 芦穂

火葬のにもあの窓この窓判が要り
遺線がついて合併号となり

大阪府 上田 春柳

媒酌はしたがその後は知りません
忘れもの係吞氣に呆れて居

大阪府 麻生 梨里

負けてから飛行機の飛んでる事も忘れ
暴風雨ひよつとしたら死ぬなと思ひ

大阪府 森下 愛論

少女もうヅカのとりこの臍を持ちぬ
道を説く人も生きとし生ける人

存在を無視されたまゝ会は果て

思ふだけ言うて淋しさだけ残り
腐るからこれも喰べどく肥りやう

布施市 森下 愛論

捨てられた事を知つても紅は引き
接吻一号女ちつともあわてない

大阪府 太田 良子
貧乏はいといませんか云ふたけど
美しく見せる仕ぐさを娘は覚え
未亡人の恋は細々続くなり
母さんに内緒なのよとダンスをし

尼崎市 靜岡 忠八

勧誘はなんぼも出来ぬ折鮑
慰安会飲みなさんなど見送られ
慰安会のためにワイシャツ買ふて来る

大阪府 松江 梅里

氣前よく腹の通まぬビール抜く
御祝儀を帯に挟んで御返盃

岡山縣 直原 七面山

女をんなを養めて冷たかり
セーラーのまだ恋知らぬ風勢なり

慾情を殺しつゞけて二十八
兄が邪魔な恋愛戦に身をさらし

潔癖のまた恋愛愛を取り逃し
告白の残り手紙で言つて来る

岡山縣 黒田 笑泉

貧乏もよし孝行の子が一人
ギリ／＼の線女それからそつけなし

旅なれた膝え古びた時間表
時間表通りの旅に急がしく

宇部市 上林 粗影

この帯でもう一度燃えたい未亡人
よき裸像その一線が法に触れ

失業のウツカリ出逢つたサンドキツチマン
暇なとて銅貨まで磨く性格か

お客様があるのに又肥汲みが来
寝てゐれば佛起れば執達吏



島取市 河村日満子

支拂に女は向ふむいて出す
人相がすでに貧乏人の子だ
泊り込むほど飲まねばならぬ交際か
言ひ傳へますがと夫人引受けず

兵庫縣 家沢 齊花

家借りに行けばゆつくりかまへられ
台風へつかまへどこのない怒り
まゝごとにママの甘える真似もして
ブルジョアは親の世話まで人まかせ
橋筋をぶら／＼マツチもろて來た
同権の時々甘えてみたくなり

滋賀縣 黄瀬 美秋

伯母さんと呼ぶ子がふえてまだ嫁けず
研究科などと落第してゐるなり
もて余しながらも女はれており
不本意乍らと催促のきつい文
内心は養子でもいゝ腹であり
未亡人喪服姿をはめられる
着飾つて女は当もなく歩き
買出しに馴染まれてゐる老巡査

岡山市 藤本 満年

まん中で流れにまかす涼み舟
夕涼みついでに端書入れてくる
風上へ肥えた男が來て座り
學職経験もなく委員さん

岡山縣 福島 鉄兒

考へて見るわと女術にのらす
末ッ子が兄の落第ふれ歩き
食えてゐるのを友人が不思議がり

岡山縣 直原 湖月

柿ばかり産後の窓に赤く熟れ
岡山縣 黒田久米女
叱られて教科書めくる音を立て

強硬な妻の無言にかぶと脱ぐ
針だこで今日も支えた未亡人

岡山縣 藤本 茶々

台風へ子に見せられぬ恐れよう
往診に風邪はあわてゝ床に入り
出不精な姉が仲人初めたり

大阪市 塩浜 一路

熱愛もしないで心中して仕舞い
顔だけが年頃である女なり

兵庫縣 榎南 夏六

生來の大声恋をさゝやけず
鍵持つたまゝ會計課員居なくなり
運だけで出世した様な友に合ひ

大阪市 伊藤 迷宮

デパートへ釘一本を買いに來る
サンダルは汚ない爪だなど思い
藤椅子でくさめをしてくる金詰
親切な車掌の服に継ぎがあり

兵庫縣 小島 無聖

澄してはいるが昨夜はキツスして
人生がどうのこうのと平社員
一度だけと言つてはいたが又許し
戦友を埋めた時もこんな露

大阪市 西 いわを

今日もまた行末話すビルの下
正直に話しお客を逃がしてゐる

岡山縣 高山 朗笑

雪に熱頬埋むる恋のして見たし
泣いて思ひはれる子供になりたい日

岡山縣 杉山 一貫

草刈りの濡れてもやつぱり手つばする
明月へ汽車の煙もくつきりと

岡山縣 服部十九平

妾宅の猫流し眼で人を見る
妻に客ありて二階へ避難する

玄關はまだ立話黄昏るゝ
行水の父さん盥の底を抜き
宝くじ当るし牛は子を生むし
唐紙の破れ隠したカレンダー

西宮市 田辺 由布

子を負い妻の手を取る水の嵩
病軀にも生きねばならぬ子を背負い

療養日々

安眠の朝へリンゴの香と色と

大分縣 桑原 表情

病棟の盜難さわぎパン一つ
研究に飽く日を家中待つて居り
二号とは知らず薬價まけてやり
代診を連れて看護婦退職す
忘恩は仕らずと留守に逃げ

熊本縣 成瀬 月仙

討死のやうに月見の酔ひつづれ
疎開していた人もくる秋祭

○

朝煙草何んの慾なし願ひなし
オイ風邪をひくぜと男から折れる

松山市 前田 伍健

胃酸過多

胃痛・胃潰瘍に...

ノルモザン錠

45粒入



大坂・武田薬品工業株式会社

郎路生麻

書棚を整理していると古い句集名簿が幾冊が出て來た。随分いろいろな催しをやつてゐる。

バラく、とページを繰ると、なつかしい人達の名がならんでゐる。

もう故人になつてゐる人もあるし、今は何処にゐるのか、音信が絶えた人もある。未だに続て句會に顔出している人は案外渺ないのに驚く。いつの間にか句會から姿を消す人たちの原因を考えて見ると、生活環境が變つて句會へ出席することが出来なくなつた人が多い。いつまでも続て出席が出来ると云う人はホントに恵ぐまれた小教の人達であつて、あとには入れ代り立ち代り變つて行くことを、名簿が物語つてゐる。

中には句会に出席しても詰まらないからと考へて來なくなる人があるが、そんな人はホントに句会の味と云うもの、句会のよさと云うものを知るまで句会に出て來ないで、自分の句が抜けないからとか、句会の句は詰らないからとか、自分本位の考へ方をするとか、浮氣づばい性格の持主が各

い。句会と云うものは、そんな單
純な考え方で左右されるほど無價
値なものではない。

最近句会に出て來たMから次ぎのようなことを云つて來た。

「久振りに句会に出て川柳のフン
イキにひたり、コツ／＼とひとり
で読み、考え、捨て、した二年あ
まりでしたが、やっぱり句会は味
の素になります」と。

一夕の出席が何処まで、味の素になつたのか知らないが曾てのMは、随分熱心な作家であつた。そして支部句会を開き、支部句報で出してゐたが、應召と、徴用で支部の継続が不可能になり、支部も自然消滅の形になり、自らも震災に遇ひ、生活環境に大きな変動があつたので、川柳をやめた訳ではなかつたが、句会に姿を見せなくなつていたのである。

古い作家でも、句会で句が拔けることは、悪い氣持はしないものであるが、拔けることのみに有意味になれる時代はまだ初心者であると思えば大した間違はない。自分で自分の句がハッキリ判らないので、拔けると云うことは、つの標準になるからである。初者は拔けないより、拔ける方がいから、大いに拔けるように勉めることである。そして拔けなかつた時には、なぜ拔けなかつたを檢討して見ることである。

句会と云うものは、必ず出るうにしていると、出られるものがあるが。一度休むと、一寸した

障があつても出られなくなるものである。

都
信
(2)

福田山雨樓

今秋國會圖書館で音樂に関する古文書の展覽會を開催する予定で、目下その出品目録書を作成中であるが、明治九年に文部省から發行された「教育雜誌」第一号にロシア（木枯園）から我國に藝術大學（音樂大學）設立案を提示した全文が掲げてある。音樂學校設立の參考案になつたものであるとの事。

は勤務の都合で倉敷市に間借して船穂へ帰へつたり、倉敷で泊つたりされているとのこと▼尼縁之助氏（出雲市）の通信によると、出雲では、食糧事務所、大和紡、郵便局等職域による川柳グループが生まれたとのこと、小倉へち、竹原平、森山壯の諸氏が縁之助氏を援けて、今後の出雲柳界は相当期待としてい、だるう▼黄瀬美秋氏（滋賀縣）は十月九日に高砂鉄道病院を退院滋賀縣貴生川町に帯えらた▼福島鉄児氏（岡山縣）から通信によると、十月十五日夜、川維美作支部では弓削平、美泉、七面山、一貫、鉄兒の諸氏

と婦人部の久米女、時雨、麗甫さん等が今後の川柳普及に就いて懇談し、婦人句会の拡張、川柳普及として、今年計劃、会員四百名を目標として邁進することを決議された」と山根白星氏は東京都から、高岡市阪下町八尾橋本産業高岡出張所内へ移られた「服部十九平氏（岡山縣）は月刊山陽泰

いと思つてゐる▼川村好郎氏（東京都）は日本自轉車新聞の「日自柳壇」の選者を同社から依頼されたので、全國の自轉車関係の方は大のてに投句された▼吉田水車氏（名古屋市）は第五回國民体育大会を祝して「御車の今は親しき御紋章」の句を寄せられた▼大鶴喜由氏は明石通信療養所から、京都市左京区岡崎山勝寺町、京都通信院局長に榮轉赴任された▼村松夢裡氏は大阪から京都市左京区淨土寺眞如町四番地へ轉居▼佐野ト占氏（八代市）は八月に八代市觀光協會を辭し、その後独力で觀光會を組織された由發展を祈る▼蛭子省二氏（愛媛縣）は病褥で句會を催されたりしていられ「病衰の小猿の顔に似しといふ」の句を寄せられた▼安川久留美氏（金沢市）の長男茂道君が永眠された▼行年廿三歳「のびく／＼風にたはれし屋根の艸」の句を寄せられた哀悼の意を表する。

不朽洞

▼浅田一博士
(東京都)は

会から

病狀が悪化され門下生達に

よつて輸血されてゐたが、十月に入つて小康を得られたとのこと、自分ではもう十年以上生きぬかないと仕事ができとまらないと云つていられる。御自愛を祈る。▼山分淑郎氏(岡山縣

都の図会図書館
え勤務されること
になつた、同氏は
絶えず色々と編輯
上に就て建言され

どなた様にも喜ばれる

大丸の商品券

卅円—五千円

京都・神三店及び
高知・大丸・鳥取・大丸
下関・大丸に共通

大丸

大丸心齋橋

一階



近作 柳樽



借りた袴の又裾をふみ 廣島縣芳泉
宿賃を浮かす夜汽車の足の冷え
闇米の金でこつそり京参り
榮轉の度に故郷へ遠ざかり
役得は島の娘に酌をさせ
未亡人それなりけりのミシンふむ
マツチだけもらうお客で混んでる 大阪府きさはち
税務署でしやべる原稿書いてゐる
加工すし米を持つたをあなどられ
ボーナスもなくストもなくつめてゐ
ターミナル金のない顔ばかりなり
競輪に負けてビールの泡みつめ
暇人といはるゝ様な事として 金沢市陽々
別れては居られぬ人どやつと知り
勉強をしていて恋に逃げられる
付け込んで家主絞れる丈け絞り
行き先きは何所ノホシと若夫婦
深刻な顔失業でございます
アルバムの剝がれた所は前の妻 岡山市迷窓
結婚の酒で費つた金が惜し
社説面説明すれば寄りそうて
慾情を見抜いて女話題かへ
新婚の疲労を見せずミシン踏み
新世帯不思議な程に声立てず
父親の二号と知らず好きになり 津山市白柳子
氣にいつた勤め給料くれぬなり 同

寡婦美しからず寡婦のまゝで居る
醜切りの後へ榮轉荷を運び
札束へ母がおじぎをしてしまひ
ショウインドー之れでもか 貴金屬 出雲市へとち
思惑を藏にねかせて不眠症 同
ジェーン颱風
和蘭が恋し阪神浸水地
夏季大学山の中ほど行き渡り 同
日米水泳大会
男性美跳躍台に燎として 同
退院を祝ひ婦長の母らしく堺市太路
着るものを先づ考へて約束し
着替れば又見合かと疑われ
金詰り位と税務署思つてゐる
染替を着て居りますと云ふ羽織
老ひらくの恋は日記へ偽らず 佐賀縣えい
氣易くも浴衣の背を叩かれて
下足番するの履歴書二通り
静物の如くベツトに藥瓶
貸ボート一そう帰らず記事になり 三原市正一
白鷺のハンカチ投げたように飛び
ボスターの美女にもたれて待呆け
恋愛論彼のを鵜呑みして愛し
嬉しさは家まで傘で見送られ 愛媛縣曉明
留守番を全うしたと犬の顔
性格は傘も借りずに濡れてくる
月曜日君もか僕も豆が出た
税務署で怒りはるの損だつせ 高知縣十四郎
噫々無情貞女のまゝで終らされ
童貞といえばかいしよのない 同
略字とは迂闊なりけり汗をかき 同
良く動く眞赤な唇のサンダラス 熊本縣鶴堂



古川柳と歌舞伎を彩る女(四)

水谷竹莊

戀娘昔八丈白木屋お胸
おとつきさん日髪にしなとお胸云
江戸中の質の流れる黄八丈
八丈の目引紺屋へ染に来る
其座敷質にも附けぬ黄八丈
反物をお熊一色けちをつけ
夕薬師などお熊はつくつて出
芝居では白木屋お胸だが実録は白
子屋お熊である。実録のお熊は奸
夫と計つて夫を殺した悪婦にて死
罪に処せられたのであるが、裸馬
に乗せられ江戸中引廻しの時に
に派手な黄八丈の小袖を着、水晶
の珠数を首に掛けて居たと云ふの
で其頃の女は皆黄八丈の衣服を着
ることを忌嫌うたと云ふことであ
る。
この事件を芝居に仕組んだのは
安永四年九月堺のあやつり人形豊
竹新太夫座で「恋娘昔八丈」と名
題して興行した。作者は近松貫左
吉田角丸の兩人である。
白子屋を白木屋とお熊をお胸
として、手代忠八を丈八となし、
お熊が着た昔八丈を借りて、名題
にはめたものである。
輕くいつても八丈がものはあり
大胆な娘のあとへ餅屋越し
白子屋のあとと餅屋とは思附き
八丈のあとで日本の餅を賣り
たしかお熊はこゝらだと餅をく
ひ
あれ程の大罪を犯したら、いくら
輕く行つた處で鳥流の潤間は免れ
まいとの意を八丈島と云つた句に
お熊を寓した臭がある。
又白子屋のお熊外連累一同処分
の後欠所となり、其跡へ和國餅と
云ふ餅屋が出来たとの事である。
祇園祭禮信仰記の雪姫
雪姫も鼠ののぞく恥しき
繩を切る鼠は雪の足でかき
雪姫が足の指先で鼠を描く芝居で
有名な金閣寺の場面を詠んだ句、
足利の天下を屈ふ松永大膳は、
降り積つた雪の中に雪姫を縛めた
が雪姫は地上の雪に足で鼠を描く
と、それが抜け出て、その繩をか
み切り姫を助ける。金閣寺と言へ
は京都名物の一つに数えられて居
たが、此間焼失したのは惜しい限
りである。
壇浦兜軍記の阿古屋
二十筋かけて重忠責めるなり
横縦まちかひで阿古屋申わけ
動くので阿古屋は琴に砂利を支
ひ
落と著荷で責めたのは畠山
上総戸の行衛しやうじは骨を折
り
景清の行衛に瘦せた琴の爪
仲達迷ひ重忠悟るなり
責められて弾くは孔明嫁阿古屋
岩永も其後稽古所道入りをし

裁判役が畠山重忠、重忠は、要、三味線に胡弓の三種の樂器を取出して彈かち、そして樂器の音色をきいて阿古屋の心境を判断しやうとする。重忠も仲々の洒落者である。

この三曲の季が十三絛、縦に讀ぶ胡弓が四絛、斜にひく三味線が三絛、合計二十筋となる意味の句が初めの句である。

又終りの句は嫁は客にせがまれて、阿古屋は重忠に責められて琴を弾いたとの句である。

十郎が初めての江戸下りに中村座で演じ非常な好評を博して二月か六月まで打ち通したと言ふ記録がある。現在では、東京では中村芝翫、大阪では中村富士十郎の、娘道成寺がよい。道成寺の所作には薄闇に次いで山盡しの文句がある。

遊女に三曲をやらせてその音色で罪を断じやうとしても、それは無理と言ふものだ。そも馴れあひの始めからと、のゝけを聞かされた事と思ふ。

一品料理と生そば
グリル 芝 鶴
上六キヤビトル映
画館 東三軒目

鹿子娘道成寺の清姫

歌舞伎を彩る女もここらで最後の幕をあけて終りにしたいので華やかな所作鐘供養の場

道成寺上野へ芝をさげて置き、聞いたか坊主の引込みと同時に、紅白のだんだら幕を切つて落せば、舞台一面櫻の釣枝、なびまぜの大綱にて梵鐘を吊りしした場面を、上野で花を、芝で増上寺の鐘を代表さした、趣向の句である。

道成寺まで行く道も山盡し
紀伊國日高郡天童山道成寺は今か
ら約千三百年前文武天皇の大室年
間に建立された古刹である。この

一品料理と生そば
ダリル 芝 鶴
 上六キヤピトル映
 画館 東三軒目

黑硝子

大坂市大津區長柄
西通一丁目四四
山銀株式會社
電話堀川四四七番

過去語る女真実惚れて居り 豊中市直 郎 決心をしたのか迷子歩き出し 岡山縣笑 平
 ビリツ子へ母声援をためらはす 同 写真だけ光つて居るのも過去の人 同
 追放の解ける日待つ菊いちり 東京都臥竜亭 秋の日を永いと思ふ身をなげく 岡山縣悠貴女
 老母編める毛糸慈愛にあたたかし 同 予算なとおかしとアブレゲールの 同
 家を賣る話に女房無口なり 岡山市三 泡立つたジョッキは腕に重からず 熊本縣昇 月
 柿一つ残して秋の空が暮れ 同 眼鏡の奥で手品師人を食ひ 同
 タカの子は逃げて豚兒に養なわれ 岡山縣草 女子野球三振をしてふくれけり 京都市狂 風
 釣れるまで釣る氣釣る迄見てゐる 同 飲ましたる靴の厚み自信あり 同
 讚美歌の洩れる窓辺に咲くカンナ 大阪市孤 老ちぶる居ても育ちのエチケツト 米子市風 塵
 諦めてくれとも云はず嫁に行き 同 老らくの恋ボマードの店に立つ 同
 ぐち言ふな君は働く身じやないか 出雲市柳 胸病めば胸病む俳優壁に貼る 兵庫縣湯 谷
 風に身をまかしすゝきの伸びてゐる 同 首つりを待つごとく立つ浜の松 兵庫縣湯 谷
 黒眼鏡馬券を風と共に捨て 岡山市菁 立つ人は得意見送人の抜けた顔 兵庫縣五厘棒
 赤い羽根それつけてるよつてゐる 富山縣壽 生活苦ながら愛情満ちて 倉敷市日出雄
 馬券手にゴールを前の白晝夢 同 氣まへよくくれたる柿の澁いこと 愛知縣夢 佛
 街路燈の明るさほどの世ではなし 米子市富 柿の味故郷の母が恋しくて 愛知縣北 雷
 御愛嬌ですよと名人藝を見せ 同 仲人はカメラの姿弁解し 愛知縣磊 兒
 花嫁に隠しきれない差押へ 岡山縣百 男一人世のきびしさを胸に生き 神戸市愛 子
 表面は脱党と言ふ事にする 同 農繁期空巢悠々荷繕ひ 岡山縣巷 雨
 轉落の憎悪で綴る恋日記 大阪市志 夫婦喧嘩の静けさにコオログが鳴く 高知市元 馬
 抱擁へラストバンドが高く鳴り 同 横車押して成り行き打診する 下関市侃 流
 物質へば負けず嫌ひが倍も買ひ 岡山縣夜 乘氣なのは親と仲人ばかりなり 倉敷市素身郎
 目録にあて字ばかり填めつくし 同 退院をさせて看護婦ものたらす 足利市可 郎
 台風に見破られたか安普請 岡山市四 菊人形女房天下が子を背負ひ 兵庫縣種 三
 失業のある日煙突ばかり見る 同 ひどなかでキセルはたくも馴れて来 米子市鱒 三
 囁けば女笑つて柿をたべ 出雲市壯 もう出来てもど母産制に氣がつか 岡山縣稔
 かたむいた家に住んで皆んな無事 同 北風に芒も冬呼ぶ姿なり 岡山市紫 若き日の日誌茶代の多かりし 大阪市六竜子
 アベツクは他人の楽しさ氣に 同 大声を出せば訛の出る社長 大阪市樂 天 未だあると外國品の投賣場 岡山縣博 柳
 全快の喜び爪をチヨキンと切る 同 覗き込むようにして見るストリップ 岡山縣露 求

すと、腹の底から淨化されて心の
 かすをすつかりはき出した感がし
 ます。詩の句は自分迄詩境に連れ
 込まれて自然に目につかびます。
 中には一滴の水も漏らさぬ全く句
 の通り、ようもこれ程うまく言ひ
 表わせたものだと思わず舌打ちし
 て、だん／＼作者がにくらしくな
 る程感心させられる句もありま
 す。もし私の感心が間違ひでなかつたら、これらの様な句が、所謂
 藝術と云ふのでしようか。こうし
 て「川柳雑誌」のお蔭で學ばせて
 いただき楽しませてもらひ、こん
 な嬉しい事は有りませんが、さて
 讀つて自分の句の未熟さを感じる時
 ほと／＼あゝそがつつて、しみ
 じみ日暮れて消遠しの感じがいたし
 ます。

然しながら乞食の子も三年た
 てば三つのたへも有りますので
 先生の恩愛に甘えず心に鞭打つて
 努力し、ごうにか一句でも皆様の
 眞似の出来ましようになりたいと
 奮闘を続けて居ります。最後に先

生と奥様とのご子も同じ自分の
 子と云ふ御氣持一視同仁の暖かい
 懷に抱かれて育てられて行けま
 す。ことを、誠に有難く思つて居りま
 す。私は今年になつてから、あつ
 かましゆこごいでしたが、二度も
 御目出度い会合に参列させていた
 だきまして、先生御夫妻に直接師
 事し、御慈ひ申す御が益々深くな
 りました。私などは、句も碌々出
 来ず、まして感想など發表する柄
 ではありませんが、感激の余り止
 むに止まれず筆をとりました。
 (二五・九・一〇夜)



麻生路郎著 水武書房版

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

々噴評好

本書は著者が多年のウシチクを傾けて執筆しただけに川柳の新
 指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなもの
 か」から説き起して収むところ三十七講、平明で親切で、初心
 者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得する
 ことが出来る。多年川柳とある人たちにとつても又好参考書で
 ある。敢て一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價一〇〇円 送料 金十二円
 取次御注文は 大阪市住吉區西田五丁目二五番地
 川柳雜誌社 電話口座大阪七五〇五〇



詠史川柳

につぽん

戸田古方

古代社會(續)

(二) 白鳳時代(六七三—七一〇)
關西本線郡山駅の北、車窓から見える薬師寺の東塔、藝術史上飛鳥より天平の過渡期を白鳳という。武蔵國深大寺の釈迦、法隆寺藏の橘夫人厨子の本尊、薬師寺聖観音、それから焼した法隆寺壁画の出来た時代
白日の中に白毫明るすぎ
含有の金にフエノローサもあきれ
(註)フエノローサ 明治初年の御備教師 イタリヤ人
複製の方に馴染のある壁画
(二) 遣唐使(六三〇—六三八)
小野の妹子によつてなされた遣唐使の後、回を重ねること二十三、約二百年間つゞく。浪華三津の浜より四隻を以つて一船團となり渡海。大化改新と天平文化の原動力となり、平安朝に至り菅原道眞の建議により停止す。

浦島のような顔して流れつき
儒化人にきいて帆の位置少しかえ
船底へ貰うたものや貰うたもの
鑑真の顔の中で海が荒れ
揚貴妃をちらりビツグニユース
なり
長安の水の悪さも持ち出して

(三) 大佛(七五二)
聖武天皇が國の総力をあげて建立されたもの、聖徳太子の理想が一應形をとつた。されど形式のみで、色々の弊害は自らその間に醸し出され、切角の大化の改新の実は次第に薄れてゆく。

(四) 天平時代(七二〇—七五二)
天皇を莊嚴すけるための大佛とその軌を一にするのが天平の文化、唐文化の直輸入で中國のみならず西亞の文物をその内容として正倉院のコレクションはその面目を存して

いる。

これが執金剛呼吸とめて呼吸とめて
(註) 執金剛法華堂(三月堂)の秘佛

秘佛

一刀三乳鑑真和尚の眼を刻み
正倉院鑑は二重の鏡に入れ
(二五) 古事記(七一〇—七二〇)

明治の文化が天皇親政を正当づけるために動員されたように、奈良文化にも又同じような作爲がある。古事記に正しい歴史をつたえすして、神話と傳説をあたかも信ぜざるを得ないものゝようにしているのもそのため。
恐ろしいことを語り部がおぼえてい

何ひに大臣自ら朱を入れる
創世記日本人としてかゝれ
安麻呂にして少々はあほらしく

(二六) 貴族と農奴(八世紀—)
班田は統々と私田のために減少し、班田農民の生活は窮乏し、彼等は耕作放棄(逃散)を以て対抗し、浮浪の徒と化し莊園へ流れ込んだ。

逃散(五人組でも追ひつかず
莊園の子飼へ無理もい兼ねる
公民私民ともかくにも生きるすべ

(二七) 二つの流(八世紀—)
争ひは農奴と貴族の間だけではない。貴族間でも巨大と弱小の間には協調なく、弱小の藤原氏は巨大な伴氏氏の勢力と新体制のために戦つた

そしてその間を利用して藤原

添削會

會員募集

氏はのびていつた。和氣清麿事件もその一挿話。
御家柄ごうも意見が古うなり
道鏡の怒り御経を脱みそこね
演出の通り清麻呂やつてのけ
大伴の家持歌にだけこのり

(二八) 遷都(七九四)
政治の行詰り打開として都京都にうつる。奈良への場合
は大陸への誇示という目的もあつたが、今度の平安遷都は純粹の轉換を意味し、寺院一切を旧都にのこして来たことは注目に値する。坂上田村麻呂が懸案の蝦夷地を征服する
おいてけぼり愚僧の首にかゝつて来

新都検分鴨の川原におりてみる

▼添削・批評を希望せられる方は左記小規により至急申込まれたい。
☆入会希望者は住所、氏名、雅号職業、生年月日記入の上申込む事
☆作品は、一人一回五句(会費同封)
☆会費一回 百円(二回郵便切手代用可)
☆添削原稿返送用の封筒に宛名を記載し切手を添付しおく事
☆講師指名のこと(指名のない場合は当方で適当に処理)
☆講師
麻生霞乃先生 福田山雨樓先生
須崎豆秋先生 水谷鮎美先生
申込所 川柳雜誌社内
川雜川柳添削會

(二九) 弘仁時代(七八〇—八八七)
奈良の理論佛教から平安の実践佛教へ、自らの悟道のために都座をきき、山岳へ、結界、精進して道をさきわめる。
高野山に、比叡山にそして室生寺などにそのドロテスクな強烈な遺物をのこす。
搾取となれば坊さん敗けています
まる彫りの木目通りに立お膝
六臂それぞれ何か持つてゐる振か

(三〇) 密教(九世紀)
眞言秘密といひ、即身成佛といふ。偶像を重んじ、儀軌を尚び、加持祈禱を行う。曼陀羅の意義を議し、本地垂迹

の理論化に成功している。
即身成佛御簾のうちにもまぶしそ

入定を信じられないまゝ下山
陰陽の和合にまでもふれてくる
大塔へ遠慮の鑑がなりやます

徒然草と古川柳〔追補〕

富士野 鞍馬

徒然草四十五段に
「公世の二位の兄に、良覺僧正
と聞えしは、極めて腹のあしき
人なりけり。坊の側に大きな
榎のありければ、人榎の僧正と
ぞいひける。この名然るべから
ずとて、かの木を伐られにけ
り。その根のありければ、きり
くひの僧正といひけり。いよい
よ腹だちて、切りくひを堀り棄
てたりければ、その跡大きな
堀にありければ、堀池の僧正と
ぞいひける」
とあり、公世は従二位侍従

で、良覺は叡山の大僧正であ
つた。

世人のわる口は外形をいく
ら変えてもだめだ、その心の
わるいのを改めなければいけ
ない——という兼好の教訓的
諷刺である。

そこで古川柳は次のように
詠んでいる。

僧正に氣をもませたは榎なり
(タル七二)

榎一本であまたたび和尚じれ
(タル一六)

あだ名に困つた僧正一人あり

榎一本に三度まで腹を立て
(一五)

切株も堀れと僧正下知をなし
(一七)

ますく立腹榎芽ひんむしり
(二九)

僧正の腹あしくする榎たけ
(二五)

榎芽はえたとに異名もうつけず
(二九)

二三人くより榎を根から切り
(四)

僧正はけふもとうふに榎たけ
(四九)

どうしても僧正榎はれからみ
(四九)

僧正は榎の根まで羅せつさせ
(一三五)

五十四段に、御室(仁和寺)
の雅児をさそつて、法師ども
が予め、弁当を紅葉の下へ埋
めておいて、祈禱の驗によつ
て弁当が現れるように仕掛け
て置いたが、その弁当を誰か
に盗まれて法師のトリツクは
失敗した——ということが、
書かれてあるので

御室の雅児は空腹な紅葉狩
(傍 初)

という句がある。

百十八段に、鯉の効能が書
いてあることは前述の通り
で、それに次の句が又詠まれ
ている。

髪結はついで忙しいので自分
の髪の手入などしていられな
い——ところをいつたので
ある。

髪結はついで忙しいので自分
の髪の手入などしていられな
い——ところをいつたので
ある。

髪結はついで忙しいので自分
の髪の手入などしていられな
い——ところをいつたので
ある。

髪結はついで忙しいので自分
の髪の手入などしていられな
い——ところをいつたので
ある。

髪結はついで忙しいので自分
の髪の手入などしていられな
い——ところをいつたので
ある。

髪結はついで忙しいので自分
の髪の手入などしていられな
い——ところをいつたので
ある。

選介之玲 浪 ラ メ カ 吟 題 課

一世一代カメラの前の据模様
一人だけ他所見をしてる記念帖
ハイキングカメラは先に後になり
コンパクト長く待たせてい、ボーゾ
天皇の眼に無作法なカメラマン
肩抱いてごうたをカメラ妬けさせ
カメラマン景色に入れる人待ち
写真師のうまさ笑つたことが撮れ
写真機を持つて来ぬ日のいい構図
シャッターへエフロンはす母がおり
趣味のカメラへコスモス咲き乱れ
天理教カメラ(おさる)ハツピを落
天高くパン喰競走写される
新妻へカメラを向ける菊日和
結ばれる今宵カメラの灯はまじ
釣り上げることを待つてるカメラマン
篤農家牛と一緒に写される
末っ子はカメラの方を見ていない
フラッシュを浴びて手錠の主が来る
写させて貰う自信のないカメラ
芳泉

シヤッターを切れはるんだ顔になり、鉄
極刑へ向けたカメラがちと慄え
アベック(へる)自動シヤッター鳴る
バイヤーのカメラ捕へた京舞妓
はにかんだことをバチリと写される
時の人カメラの中へ分けて降り
カメラも諦めまじし講議録
全快の友を写して病みつゞけ
嘲笑か自嘲かカメラに向つて笑み
佳・カメラマン土表の砂を浴びて撮り
佳・もう少し寄れどカメラは氣をかし
佳・逆光の砂丘へカメラ位置を変え
佳・婆さんの何時写してもいれぬ顔
佳・フライング富士はかくも助けて居る
人・表彰の一家カメラへ堅く立ち
地・フィルムを又取り替えて秋の雲
天・判定をカメラに委す鼻と鼻
▲課題を外れて「写真」になつた句が相
当ありましたが、捨てるに惜しいもの
二三句抽出いたゞきました。(玲之介)

山之内

血圧降下に
アーグレミン 錠剤注射
血管アウトホルモンとアミン塩類
山之内製薬

動 静 (其の二)

▼木村章々氏(大阪)の令聞が十
一月十日午後六時半に永眠された
謹悼
▼文藝懇話会総会が十一月十八
日午後二時から、府立図書館記念
室で開催され不朽洞会賛助中村祐
吉氏の滄英談があつた。なほ同会
から來春を期して季刊誌が発行さ
れることとなつた。

(傍 初)

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

十月例会

(本社)

十月七日 午後五時三十分

於 大宮文化会館

作句シーズン仲秋の一タを受賞の如何にかかわらず、名句へひたむきな柳人によつて活氣ある句会になつた。水谷鮎美氏は「中学の桐の花こそなつかしや」(豆萩)其他について句評をされ、路郎氏は柳話に熱弁をふるわれた。今月の不朽賞は、石岡正司氏の手に落ちた。九月三十分盛會裡に散会。(文蝶)

出席者 路郎・文蝶・笛生・春男・柳堂・蛸牛・鮎美・北海・生々庵・哲水・正則・普夫・淡舟・三司・春柳・晴峯・野介・史葉・志乃布・香林・愛論・恒明・鬨骨・古方・栗・夢裡・菫乃・梨里

兼題「展覧會」 麻生路郎選 院展を白眼視して無名なり 野介 招待の展覧會は淋しすぎ 鬨骨 展覧會隣の室は椅子ばかり 桃々 展覧會はめとけ 養子なり 恒明 ルノアルピカソの中で煙草吸ふ 三司 展覧會賞める言葉は忘れとり 志乃布 展覧會の画の下で仲人立廻り 鉄兒 裸婦の像冷たく並ぶ秋の全 愛論 展覧會子孫の作品の位置をなす 柳清 展覧會PTAがお叩儀する 鮎美 母親して産制展を見て帰る 十九平 日展で落合ふ恋を羨まれ 春集 尤もらしく展覧會を歩く顔 生々庵

マル四角何やら描けるモダン展 思出せぬ人とも出合う展覧會 WCの横まで展覧會盛ん 展覧會だん／＼解らぬのが並び 子沢山展覧會に似た裸像 院展へ見合の客もまされ込み 展覧會大が一匹迷ひ込み 恩師の胸像に沙汰を託した展覧會 展覧會我が子の作でばつと云ふ 未亡人の噂がしきり遺作展 初入選西陽氣つかふ位置にあり 遺作展飲み友達が世話を焼き 二科展へしようこたが尻につき 裸婦の像ワイフの顔に似かひて 寶物にならぬ大作さみしまれ

兼題「孫」

土井文蝶選

孫を連れ稻の出来栄を見て歩き 外孫が一層かはゆい祖母となり 三味ひける姑で孫がよりつかず 孫と来て一番風呂を泳いでゐる デンボーに触れて孫が叱られる アモンクラシー二世の孫が祖父に説き パーへ来て孫の事なぞ言ひませぬ 孫の代になつて家産が忘れられ いたすらへます可愛い孫であり 隔世遺傳小鼻も孫は生きうつし おぢいちゃんのお膝下トをなだつて 居孫の守日向に蟻が続くなり 口紅を孫にもつけて祭の灯 孫の守ごちら勝つてもよい野球 大臣になれよと孫の相手をし けう日の孫は戯けに寄りつかず 丹念の菊を孫にひき抜かれ 御土産の足袋が大きい孫の足 孫も抱きたしホールへも通ひたし 早よ死ねと云わんばかりに孫がよえ

看板を覗したまふて店を開め 看板へ埃がぶせてパスは行き 看板の上にちいさく金貨屋 看板で二階のボロをかくしとき 看板の誤字を見つけて得意がり 看板屋背丈位な文字をかき 看板の蟬鉢巻で意勢よし 看板のお古で明日の小屋が出来 看板をはつてつて明日の天気はめ ホテルの看板淡いネオンで色ざら 看板に書けないのも賣つて呉れ 当り矢の灯へ屋台店寒う更け 看板は煙草屋にして高利貸 看板が飛んで商賈いそがしい 似顔絵も画き看板もたのまれる 看板のとなでもない字消されて 看板の花柳小菊雨に濡れ 看板は電車が通る方に向け 看板も地味に老舗は税に堪え 先代の看板のまゝごんそげ 何ぼもろての看板に屋根貸して

あみだ籤鼻毛を抜いて思い出し あみだ籤に交り不惑を袖カパー これきりの金を出してあみだ籤 あみだ籤の頃の舞妓も俺も老い 兼題「氣迷ひ」 前山北海選 氣迷ひが数字となつた数字見る 氣迷ひの今日のアベツク見合せる 氣迷うて結局高いものを買い 氣迷ひの貰へるものを受け損ね 氣迷ひを叱る母あり見合ひの日 氣迷ひの迷ひ二号は今宵厚化粧 外電を手に賣り買ひの駈路に立ち 氣迷ひであつた嬉しき燭をみる 氣迷ひへ佛壇の鐘チーンとうち 三十後家氣迷ひまで承知せず 女房の氣迷ひ猫の柄を変え 氣迷ひへおかみ正座へつて寄り 教祖来る氣迷ひ群が駅に待ち 氣迷ひへ一家心中の今朝の記事 氣迷ひへ医者はきつぱり診察し ちらつとわだつみの声がする 天眼鏡氣迷ひダイヤ見逃さず 氣迷ひの据え膳が病みつきとなり

特ダネがあるのか飛出すノートハット 史業
終電に忘れてからのノートハット 野介

川雑布
哇支部
ウイロウ社句會(ハワイ)

七月 於 市岡曉舟居

浴衣

青い眼の嫁に浴衣の襟合はず 潮風
浴衣を着るに浴衣の講和論 草一郎
急病の電話に浴衣飛んで行き 張月
常夏のホスピタリティは浴衣より 麗花
時折りは浴衣姿を見せて呉れ 銀水
浴衣地を逆輸出する変り様 法水
幾十年ぶり浴衣で登へ寝こんだ 東田
惚れたと言はす浴衣を纏って 紅宿
お揃ひの浴衣で古き飲み直し 純香
対浴衣カヌーは少しづつゆれて 野矢
浴衣着て深見えがくボーズ見え 快夢起

川雑
竹原支部句會(廣島縣)

十月十四日 於 福岡葉留路居

黒本・芳泉報

別れ・秋祭・腹・友情・鏡
生別も知らず子供よく眠り 芳郎
別れてもいゝわと男見下げられ 可笑
秋祭りあの娘に会へる髪をそり 芳泉
秋祭り急に変わった空模様 賀清
同腹であつたを課長見たがさす 芳郎
スト続き労資が腹のさぐり合ひ 芳郎
腹かけに土産も入れていゝ親父 芳泉
腹さぐり合つて一服つけるなり 芳泉
腹糞もそろゝ暮にしたいとこ 芳泉
友情を交に受ける若きなり 芳郎
恋しさに友情までも犠牲にし 芳泉
そつけない中に友情あふれてゐ 芳泉
信頼へ男同士の瞳がうるむ 愛鳩
友情は俺が君がと派手に呑み 可笑
あきらめの涙鏡の中で拭き 同笑
鏡台へほとりを濡れて無事な後家 芳泉
誘惑の笑顔鏡の中で見せ 葉留路

川雑
下関支部句會(山口縣)

九月二十三日 於 福岡 王寺

國弘牛休門報

予備隊・サンダル・似合ひ・夜明

け前・命日

食へぬから予備隊になさる言はず 苦樂人
予備隊へ次男三男銀を捨て 柳虹
捨て切れぬ赤子予備隊に志願をし 柳虹
姉さんが留守サンダルを履いて見る 紫蓮
サンダルの並ぶ樂屋へはいりかね 良坊
サンダルの揃つた足が歌になり 素人
保護室に迎ふサンダル持つて来る 苦樂人
サンダルを脱げば内氣な母であり 九呂平
サンダルの足の白さが親も眠り 九呂平
サンダルのその爪先を紅くそめ 牛休門
眠長に似合うところは太鼓腹 司樓
能く似合うところは近所が世評を言ひ 米三
お似合いの夫婦であはれ家がなし 久素
スタイルでステイルで暮らすの意 菊香
似合はない持物刑事見逃さず 米三
強盗がせき立ててゐる夜明け前 柳虹
夜明け前医者大丈夫と帰つたり 柳虹
零落を知り曉の野良仕事 久江
早起きはもう荷車を挽いて出る き子
夜明け前でも富士を惜しんで 久呂平
公報の日を命日に七回忌 牛休門
命日に戦死の管の子がもどり 米三
甘党の命日子等をよろこばし 良坊
命日に近づき柿の色を増し 九呂平
命日に無花果持つて里の母 同
稲の穂がゆれて命日近くなり 柳虹
命日を忘れる程に金が出来 素人
命日にすまない膳の箸をとり 同
命日にしつかり抱いた子の重み 柳虹
おうびらに命日すらも拜まれず 加世傳人
命日が過ぎてその後の御乱行 節子
命日は祖父だけが知るすじをつ まさ子
命日に借金取が焼香し 連恩

配給が命日の夜に間に合はず 同

川雑
岡山支部句會(岡山縣)

九月二十三日於 鉄道弘済会ハウス

藤本万年報

私・現場・グッドバイ・あゝそれ

なの・月・街角

私だけ取残されたニールツク 吉備平
私です僕です罪を譲り合ひ 鉄兒
他人の眼のなかに私の膝頭 久米雄
板囲い取れば現場晝寝する 聴夢
手に持つた鋸で監督説明し 北葉
乱闘の現場で黙り合ひになり 三海
新婚の辨当現場へ派手に着き 風來子
現場まで見て来た様な話ぶり 中山子
警察犬現場へついた鼻になり 正一
アベツクの現場で草も寝ていき 四案
母の眼に残る現場の赤い下駄 三葉
現場ももう仕上げが近い歌になり 米子
片割れが蘇生している慌てよう 満年
パイコ手を振る娘等は派手に生き 利明
グッドバイ次の男が待つてゐる 徳雄
貞操を鼻で笑つてグッドバイ 大甲帽
グッドバイマドロス霧に消えてゆく 北星
明日からの試験へ停電してしまひ 満年
待ちわびて訪れて見れば晝寝なり 忠美
妹にゆすつた恋を誤解され 北星
準備万端終れば客の来ぬ電話 四案
米一升あゝそれなのに答められ 聴夢
月ばかり賞めて恋には触れず 北葉
寝轉べばあんなとこから月が 茶々
夜動から帰れば月がついてくる 満年
十五夜の月に電燈消して立ち 大甲帽
街角のたばこやさんで送つて出 茶々
街角ではつきり酔つた脚を知り 風來子
街角を都計あつさり持つて行き 満年

川雑
大牟田支部句會(大牟田)

九月 於 三池染料保安課

富田一葉報

耳・懲張り・驚・心中
そんな事聞く耳もたぬ低氣圧 扇波

川雑
小郡支部句會(山口縣)

九月廿三日 於 小郡鉄道俱樂部

長野井蛙報

ヒステリリの鋭い程の耳を持ち 同
ピクニックいきなり恋を囁かれ 抱逸
有難い管に御経は耳を抜け 永時
等分に割つても末の子承知せず 十波
懲張りが出て盗品に足がつき 扇夫
懲張つて土産途中でくたびれる 抱逸
驚けば蛇も驚く散歩路 一葉
驚いた父は夜行でかけつける 抱逸
凄く顔に道はれて夢がさめ 抱逸
助けてと相手は火口這い上り 抱逸
慈悲の無き死体別個に葬られ 抱逸
心中までする氣ではない愛と知れ 抱逸
御馳走を子し心中と知らず食ひ 抱逸

腹・風・窓口・通勤・傘・風呂
空腹へ列車遅延の拡声機 遊
世の情け知る空腹の不倖 井蛙
腹ごなしなんて滑稽な機嫌なり 井蛙
風呂機掛けて二号は退屈し 井蛙
窓口の旗へ徹夜の腰を据え 井蛙
窓口の千田札が後になり 井蛙
窓口の女に背中であしらわれ 井蛙
切符買ふ旧師めつきり年をとり 井蛙
通勤に又ももうささい署名なり 井蛙
通勤者目で挨拶の人も出来 井蛙
末の子が傘傾むけて迎えるに 井蛙

阪田膳写版

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 株式

番一九九五 島福 話電
番四一番一 三六

夕立の上つた頃に傘が来る
行き合つた傘は脂粉の香を残し
宿の傘さしかけられて皮靴
宿の風呂混浴と知り遠慮する
とし子

貴生川支部會（滋賀縣）

九月二十三日 於美秋居

注射・職人・箒・ビール

良心に言訳をして注射受け
予防注射なじめる医者の前に立ち
老衰へたと氣休めりの注射をし
職人の時間と氣休めの注射をし
高いところ登るが好で大工なり
アリキ屋の音のほごには儲からず
新世帯箒の新を取揃え
朝また素直にちびて掃除好き
朝刊へ箒を持ったまじしやがみ
越して来た当座隣の門も掃き
冷たさを五指に覺えてビール受け
ビールでは口役くらゐがかり過ぎ
悲しさのビールはつり咽喉を過す
失業をして念願の晝寝する

斗志
利枝
美秋
苑女
李替
美秋
李替
苑女
同
美秋
同
利枝
美秋
夢生
美秋
美秋

吳支部句會(吳市)

九月九日 於吉浦消防團階上

惑

P T A 教師の恋に一すふれ
 P T A 樟腦くさいを着て出かけ
 流行病 P T A をあわてさせ
 P T A 少々なボスの事にふれ
 旧友と偶然合つた P T A
 P T A 今日 は 総会衣裳会
 P T A 先生のおつしやる通ります
 P T A 姉の縁談持ち出され
 不渡りが P T A に迄響き
 P T A 署長私服で親しまれ
 P T A 代理の姉が隅に居る
 P T A どこも野球が好きらしい
 善太郎

PTA 家では子供よく叱り
PTA 遂に結論出すふまい
PTA 一人の親と行き若き
PTA 着物の親で言ふそびれ
PTA 少しの異議をこらへとき
検束の跡角帽が落ちてゐる
角帽へ通訳頼めばちとあわて
角帽で家業は難がぬ氣のせがれ
就職がある迄角帽被つてゐ
弟の角帽チヨット胸を張り
言訳をミシンの音の中で聞き
つながりがあつて言訳控えて居
言訳がまづかつたよと飲み仲間
言訳の口へ焼酎まだ匂ひ
言訳を素直に女受けてくれ
言訳は聞かめと二人追ひ出され
言訳の細帯首に巻いて来る
言訳も上手都合の子に育ち
言訳のぐまのつまりは鼻をかみ
言訳はするなと母の腫がたすけ
三日月に薄情な人思ひ出し
お互ですまゝ実印出して呉れ

腫峰 葛峰 紅兒 彩菱 木公 正一 史球 久女 彩峰 基之 梅香 正一 魁光 千代 木紅 紅兒 善太郎 史球 葛峰 彩峰

篠山支部會（兵庫縣）

九月七日
小西無鬼

停年

停年につかみ処のないさだめ
 停年になつて弁当が懐しく
 晝寝さえ電話のかゝる夢を見て
 稀に見る元氣停年惜しまるゝ
 退職金停年らしい手で貰ひ
 停年を祝ひ希望を新にし
 阿呆言ふてゐる間に停年來てしまひ
 停年へ孫つきまといつきまとい
 退職のまだ靴買ふ野心あり
 一生の永き一服して行こか

同 齊 花 同 無 汲 指 尋 同 同 何 士

川雜
備前支部會（岡山縣）

八月二十六日 於久米雄三

煙 勉強・長生き・久し振り・仲直り・
勉強のそろ／＼悔る歳となり 忠 辛

勉強の残り寢床へ移動する
勉強をする子の机拭いてやり
子供部屋九九を覚た声になり
勉強の窓を母さん開けに来る
勉強を一人残して腰てしまふ
勉強の横内職の手がやまず
長生きも亦樂しからず稲の出来
苦勞のみする世の中へ死にきれず
久し振り出合ひ頭に呑むと言う
大仰に肩を叩いた久し振り
久し振り逢うてすまない金をかり
久し振りやつぱり大きなことを言ひ
仲直りたいが意地も捨てられず
仲直りする氣の酒が廻りすぎ
仲直り案内早いのに呆れ
煙出ぬ玩具の汽車が物足らず
客があるらしく煙がまだ続さ
実直な家眞つ先きに立つ煙
クレオン画煙の位置が又かわり

聴夢
凡女
苑子
久米雄
婉如
久米雄
婉如
久米雄
婉如
清風
久米雄
聴夢
凡女
洋子
風來子
同
久米雄
同
風來子

岡山縣廳支部句會(岡山市)

九月九日 於廳內世話寮

弁当・面影・風・出る

弁当も奥でつかわす土産店
大甲船

弁当が渡ると集合散つてゆき
忠美

弁当と見せてもスリの眼は光り
中山子

弁当のフタ半分の女事務
夢沙子

叱られた日の弁当をなべ残し
聴恭

ハイキング娘の弁当を當にして
七面山

新婚のしばらく弁当妻の趣味
四家

まなざしも優しく母の肖像画
大甲船

行きずりの窓の面影ふと浮び
九六

風向きをねらうて課長の判責ひ
夢沙子

向い風和服娘が背で歩き
九六

大胆に娘胸から風を入れ
忠美

ボスターを風裏表見せてくれ
聴恭

危機去つた病室朝の風を入れ
十九平

風向を秘書心得て取次がす
忠美

すればしたとて別の小言出る
四家

飛び出した息子の無事を祈る母
紫郎

船が出るテブが切れる手の感
出て行けとつい目を衝く倏忽期
出るとこへ出て恩師と顔が合
酔うて出たそんな愚痴と顔が合
何かも出そうない氣配顔を上げ
早出雲西陽の窓で紅を塗り
方角を決めて外交朝を出る
笠馬熱田には雑草生い繁り
共鳴をした熱情が怖くなり
熱だけで空まいしてるような恋
情熱に負けた邪恋が怖くなり

茶屋平
七面山
聴夢
中山子
風來子
聴夢
大甲帽
中山子
大甲帽
中山子
四案
十九平

川
岡大支部句會（岡山縣）
十月七日
於 學生食堂三階
大森風來子報

感傷・病床・手術・葉書・挨拶
啄木の歌に心をゆずられ
たつた一人に交て居た酒を呑み
感傷を切捨てある映画評
センチにない拾つたて書く手紙
秋風が胸の小函の蓋を開け
感傷と言はれ初恋あつてなく
感傷（ふーん）とそのまじりさ
感傷になれ／＼月も星もある

大甲帽
茶々々
通常
風來子
迷察
毒子
茶々々
満年

品質優良

タチカワペン先

大坂市東区豊後町四八
立川商事株式会社

TACHIKAWA PEN

タチカワビン
タチカワセム
タチカワ画旗

戦後派へセンチな恋が見くびられ

病床と知らず一本提げてくる

病床へ来て借金を言ひそびれ

病床へ床屋を呼んだよい天気

病床へ妻以外には寄付けず

病床へおかずの味を持つて来る

病床へ儲かる話を持つて来る

新聞の誤字病床の眼は拾ひ

病床で小説書いてから賣れる

病床の母から買物聞いてゆき

病床へ食へない土産並べられ

病床へ医者が笑うてみな笑ひ

病床へ生み立て卵見せに来る

病床に飛躍の翼休ませて

病床を抜け出た元氣叱られる

死の世界一步手前で手術済み

遺言など笑はれながら手術台

看護婦に笑はれてゐる手術台

子の生める女となりて退院し

大手術扉を拜んで母は待ち

手術台あな任せの目をつむり

一札を入れて手術に湧不安

もうすぐと云はれて手術長い

肩書が手術台でも我慢させ

金属の音で手術が一人すみ

手術する決意麻酔に頼りきり

一枚の葉書をくれぬのを怒り

愛情のうとさ葉書になつてくる

会いたいとどる葉書の隅へ書き

開業の費用葉書が見落され

挨拶のつもりが痛いとくに触れ

花嫁は黙つて頭下げただけ

挨拶が突きとばされる表町

挨拶は抜きだコップを持ち給へ

日の丸句會(鳥取市)

八月二十八日 於田中氏居

河村日満子報

へちま・提灯・宵柿・團圓・佛

珍客とへちまの見える部屋に座し 至高

聴夢

満年

迷窓

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

茶々

北星

會吉支部句會

八月十九日 於日の丸支社階上

風鈴

風鈴に負けて居らない庭の虫

風鈴を聞くほど閑居儲けてゐ

風鈴の音縁談はすゝめられ

藤椅子で下戸は風鈴眺めてる

日の丸句練習會

八月二十一日 於鳥取工場事務所

汗・蜻蛉・さらば・七夕

講釈師顔中大きく汗を拭き

花嫁の汗ボン／＼と鼻たたく

枕敷帳蜻蛉つないで子は寝て

この夏もとんぼの様にやせま

七夕に子の丹精をつけて立て

七夕のさくは母親たてゝやる

七夕のさくは母親たてゝやる

南海電鐵川柳會(大阪)

九月二十二日 於南海高等学校

貨車・若さ・退屈

米俵積んだる貨車に誇りあり 無人

芳道

日満子

雲樹

柳窓

なざき

日満子

秀治

茂雄

秀和

日満子

芳道

粗粒

壽明

遊星

天

救援米貨車でついたと聞けば

大阪へ貨車初雪を乗せて来る

貨物列車子供にぞろぞろと見

横たはる貨車だが犯人まだ知れず

貨車の屋根根柢によこれた雪を

待たされてまだの上に貨車通過

米の村玉葱の村貨車の数

留置の貨車にもたれて雲雀さく

若さでは割り切れなくて死を選び

肉体の若さで稼ぐストリップ

若いよとたしなめられて腹を立て

姉さんと云へと後妻は娘と云ひ

君僕と云ふて孫から笑はれる

書籍部と化粧品部に寄る若さ

アルバムにこんな時代もあつた僕

寂然と徴兵項の夢を見た

五十には五十の若さ齒を磨き

あの若さ誰にさぐや氣にかゝり

若いのだしつかりやれ社長云い

意氣天を衝く若さをアロハシヤ

女房は俺の若さが氣にかゝり

月に死にセンチの若さそれより

夜通して打つマーシャンの若さ

最後まで行かればすまぬ若さ

この若さ相手を代へて今日も退

尼寺に若さを捨てた経をよみ

自轉車に両手はなしてゐる若さ

落籍されて若さをちびに棒引き

ハ、キトク退屈びつくりやうて

見る方は長考の基に退屈し

退屈でなごたんまり儲けてゐ

退屈は灯のある方へ誘い出し

退屈さ時計は矢張り動いて居

退屈のなに思ひげん最をすり

退屈な人に保険屋ひつかり

水鏡

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

阪神ビル小集(大阪)

十月二十一日 於阪神ビル三階

眞実・変人 水谷鮎美報

眞実・変人

眞実の陽が眞赤なり抱き合ふ

夕刊の端へ眞実少し載り

眞実へ検査廳の椅子がたく

眞実へ浮氣が三味の音がしめり

変人にうっかり嘘を見破られ

変人の今日は氣になる釘を打ち

変人が道標のトンボつととり

恋人が来て変人も本を閉ぢ

鮎美

春柳居小集(大阪)

九月廿六日 於上田春柳居

港

霧晴れて朝の港が鼻の先

望郷の港に佇てば瞳がうるみ

諦めて呉れと云えない港の灯

ちよこざいな通訳しよる港の兒

ロマンスを求め港の灯をこがれ

港の灯大きな夢が消え

恒明

待望！待ちに待った (廿五年版)

自選川柳年刊句集

B6判 三六頁 三三〇円 丁卅四

北は北海道から南は九州に至る、全

日本代表三百六十有余川柳作家

自選十句 住所付総覧

特典 十二月中に御注文の方は

二割引 二〇〇円(丁卅四)

發行所

しなの川柳社

松本市大名町七一



編輯室にて

★一九五〇年の歳晩号である。本号を一日も早く世におくため、四ページを新春号に廻わした。しかし創作発表には影響がないので諒とされた。

★雑誌を月刊で出している生活は、ごあつたらしいものはない。日曜の仕事の中で、翌月号の仕事と翌月号の仕事をやつて行かればならぬのである。神経が損り減らされて指古木のように太くなるのを覚える。唯一の慰めは好評の二字につくる。

★産刊、休刊、退刊の多い中に本誌は一回の退刊もなかつたことを感謝したい。★新春号からの新企画について、編輯局は張り切っている。一々予告はしないが、御期待を乞う。★投句家諸氏の作句意をみだすために、課題吟を更に一題減らすことにした。★愛読者諸氏の歳晩の多幸ならんことをお祈りして筆を擱く。(路)

動 静 (其の一)

▼本社主催で十一月四日午後五時半から「川柳文化の夕」を大室文化会館で開催した。大阪通信病院川柳会は十一月廿五日午後三時から三階図書室で開催。南海電鉄川柳会は十一月十九日午前九時半難波発、南淡輪へ行。南区医師

会文化部川柳会は十二月廿一日午後七時から瑞枝邸居で開催。泉友会文化祭(尼崎市)が十一月廿一日午後四時半、新扶桑銅管製造所で開催。岸和田川柳大会(岸和田市文化祭参加)が十一月十一日午後六時から阪南会館で開催された。高砂川柳大会(兵庫縣)が國鉄高砂工場文化部主催で十一月廿三日午前十時から、高砂工場北祭大会議室で開催。大阪市復興文化祭京阪神交際市民川柳大会は十一月廿六日午前十時から毎日新聞社講堂で開催。以上何れも路郎主幹出席。熊本市文化祭参加川柳大会は十一月十二日に蓮台寺で開催。ウイロー社(ハワイ)主催の川柳大会は十一月一日に東雲別荘で開催された。(詳細は新年号)八代川柳会では十一月三日午後一時から熊本大の田中辰二氏の講演、夜は正教寺に於て句会開催。川柳句会支部婦人句会(岡山縣)が十月廿七日午後七時半から金光教集會室で開催された。備後川柳会(廣島縣)では十一月廿二日の大会を、八人居で川柳備前支部では十一月例会を四日に娘川樂居で開催した。川柳句会支部句会は十一月二日金光教神殿で開催。新愛氏(福岡市)が十一月二日来証、新聞(今治市)では希望探訪翌三日は奈良え、その夜の二十三日事として「川柳人の新聞」を、時で東上された。

最短時間 大坂一名古屋

毎日3往復

経路	料 金
特急料	600
上本町	13.40
上本町	16.40
名古屋	17.00
名古屋	13.00
名古屋	8.00

近畿日本鉄道

大阪阿倍野区晴明通一丁目

酒服用紙コップ アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切

特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社

電話 天下茶屋 二八〇二番
二八〇三番 二二九一番

風趣豊かな お好み食堂

おなじみの「食道樂街」 七階

おなごらんとんかつ
中華料理
ビール、フルール、ジュース
(外食券食費)
茶屋「甘樂」開設

松坂屋
大坂日本橋

Made in Occupied Japan

川柳雜誌 第五卷 第十二号

一冊 金三〇円 (送料三円)

半ヶ年概算 金一九八円
一ヶ年概算 金三九六円

昭和廿五年十二月廿五日印刷
昭和廿五年十二月一日発行

大阪市住吉區内代西五丁目二番地
行印刷人 麻生幸二郎

發行所 **川柳雜誌社**
大阪市住吉區内代西五丁目二番地
電話 大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

女形 (十句) 水谷鮎美選
役得 (十句) 西尾 葉選
赤字 (十句) 土井文蝶選
(一月廿五日切)

近作柳欄雜誌廿句 麻生路郎選
川柳塔 (雜詠) 麻生路郎選
文章 (評論・研究・感想其他) (廿五日切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳欄」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。
▼「川柳塔」への投句は不刊例会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行